

メキシコ、オアハカ州における修道院を中心とした宗教空間の変遷

—サント・ドミンゴ・ジャンウィトランを事例に—

Historical transition of the convent and religious spaces in Santo Domingo Yanhuitlan, Oaxaca, Mexico

岸原正憲

KISHIHARA Masanori

1. はじめに

(1) 研究背景

メキシコでは、1994年に「ポボカテペトル山腹の16世紀初頭の修道院群」が、2003年に「ケレタロのシエラ・ゴルダのフランシスコ修道会伝道施設群」が世界遺産に登録された。また各地で複数の修道院を繋ぐルートが存在し、観光にも利用されており、宗教施設を文化遺産として取り扱う傾向が見られる。メキシコ南部オアハカ州のミシュテカ地方でも近年複数の修道院が修復され、それらを繋ぐルートが設定されるなど、文化遺産として取り扱う動きが大きくなっている。オアハカ州は、先住民言語話者人口の割合がメキシコ国内最大で、スペインによる植民地化という文化混交の時代を経た現在でもなお、多様な文化が存在している。このような地域で文化遺産として取り扱われる傾向が強くなっている、修道院を中心として祭礼などが営まれる宗教空間について、今後何をどう継承していくべきか、改めて検討することが必要と考える。

(2) 研究対象・目的

オアハカ州のミシュテカ地方で近年大規模修復が実施された修道院がある3地域の中で、観光客数が最も多く¹、2017年に認定されたミシュテカ高地・ユネスコ世界ジオパークの構成地域となるなど、文化遺産として取り扱われることの多い、サント・ドミンゴ・ジャンウィトラン（Santo Domingo Yanhuitlán：以下、ジャンウィトラン）を対象とした。

修道士及び信徒／住民が活動する空間（以下、宗教空間）は洗礼や礼拝、祭礼などの活動が営まれる拠点と範囲によって規定され、時代ごとの活動内容の変遷により、その拠点や範囲も変化していくことが考えられる。ジャンウィトランにおけるカトリックの修道院を中心とした宗教空間の変遷を、植民地時代より前の時代（先スペイン期）以降の、修道士と住民／信徒による活動及びその範囲から把握・整

理し、先住民およびスペイン双方の性格を有する多様な文化が混在する対象地における、宗教空間の時代ごとの特徴を明らかにし、今後の継承の仕方について考察することを目的とする。

(3) 研究方法

文献調査を中心に、考古学、建築学、植民地時代の文書資料を含む文献などから修道士・信徒／住民の活動内容を抽出し、宗教空間の変遷を先スペイン期から整理・把握した。変遷を整理するにあたり、植民地化によるカトリックの布教や、スペインからの独立、カトリック教会の衰退など国内の政治状況の変化と、それに伴う宗教空間の増加・減少など、宗教空間に変化が生じた時期を元に五つの時代区分（先スペイン期（～1521年）／布教初期（1521年～1540年代）／宗教空間拡大期（1550年代～18世紀）／宗教機能停滞期（19世紀）／宗教空間分離期（20世紀～））を設定した。また、現地調査によって、利用状況の確認を行った。

2. 宗教建築と先住民文化

(1) 16世紀の宗教建築

スペインは、軍事的征服と精神的征服（カトリックの布教）を目標として、アメリカ大陸へ進出し、カトリック教会は植民地の統治機構の一つとして重要な役割を果たした。したがって、ヌエバ・エスパニーヤ副王領（アメリカ大陸のスペインの植民地）では、16世紀以降多数の宗教建築が建設された。16世紀の宗教建築は主に教会堂・修道院・アトリオ（宗教行列や墓地に利用された平地）・屋外礼拝堂の4つの要素から構成されていた。屋外礼拝堂とアトリオは、屋外で宗教儀礼を実施していた先住民の慣習や、スペイン人が持ち込んだ疫病で多くの先住民の命が失われていた当時の状況に合わせ、屋根のない空間で礼拝を実施するために発展したものと考えられている²。したがって、メキシコにおける16世紀の宗

教建築は、ヨーロッパとアメリカ大陸の二つの文化が接触したことを示す空間であると考えられる。

(2) 先住民と先住民文化

メキシコでは先スペイン期から様々な文明が発展し、多様な文化が育まれてきたが、植民地時代には文化的・人種的混淆が発生した。19世紀初頭にスペインから独立を果たすと、人口が多いが社会的地位の低い先住民でも、社会的地位は高いが人口の少ないクリオージョ（植民地生まれのスペイン人）でもなく、メスティーソ（混血）が新国家の国民となった。先スペイン期の文化はヨーロッパと異なるメキシコの地域性と独自性、メスティーソの原点を表すものとして認識され、ナショナリズムにも利用された³。一方、先住民の人々はメスティーソ中心の国民統合の流れの中で、国家の隅に追いやられた。先スペイン期の文化と、それを育んだ人々の末裔である先住民の人々は繋がっておらず、この二つの社会的な認識は乖離していた。1910年に始まったメキシコ革命以降、ナショナリズムが高揚し国民統合に向けて、スペイン語の教育や国立先住民庁の設置（1948年）など、先住民に対して積極的に関わっていく動きが見られた⁴。20世紀後半になると、先住民主体の活動が増加し、先住民に対する国際的な動きも活発になっていった。国際労働機関による先住民条約が1989年に成立し、メキシコは1990年に批准している。このような状況の中で、メキシコでは1992年に憲法改正が行われ、先住民文化が、メスティーソの原点という意味だけではなく、現在まで繋がって存在するものとして認識されるようになった⁵。

このように先スペイン期の文化は独立以降、一定の肯定的な認識を持たれ続けていたと考えられる。19世紀以降に制定された文化遺産に関する諸法令を見ると、1896年に考古学遺跡に関する法令が制定され、20世紀に入ると歴史的記念物などの植民地期以降の遺産や自然遺産などがその対象として扱われるようになった。様々な文化遺産の中で先スペイン期の文化遺産に対する保護の関心が、その他のものより早い段階で行われたということからも先スペイン期の文化に対するメキシコの姿勢が読み取れる。

3. ジャンウィトランの宗教空間

(1) ジャンウィトランの概要

ジャンウィトランはオアハカ州の北西部、ミシュテカ地方のムニシピオ（基礎自治体）で、周囲を山に囲まれた標高 2000m を超える盆地に位置してい

る。メキシコ国立統計地理情報院(Instituto Nacional de Estadística y Geografía: INEGI)が2010年に実施した調査によると、人口は1,619人で、ムニシピオはさらに19の地区(ロカリダー)に分かれており、ムニシピオのほぼ中央にムニシピオの人口の約6割が集中する、ムニシピオと同名の筆頭地区(都市部)がある。本論で扱う宗教空間は全てこの筆頭地区に存在している。筆頭地区のほぼ中央に、教会堂・アトリオ・修道院で構成される、16世紀建設の修道院複合施設がある。教会堂は高さ約25m、奥行き約75m、幅約15mで、現在でもミサなどが行われる場所である。教会堂の北側には、キリスト像や聖人像を伴う宗教行列などに利用される広い平地のアトリオ(前庭)が隣接し、南側には修道士の生活空間であった2階建ての修道院がある。1階には食堂や台所があり、2階は修道士用の個室が並んでいる。筆頭地区の北端にはカルバリオ礼拝堂と呼ばれる小規模な礼拝堂がある。教会堂がカトリックの聖人で、ドミニコ会の創設者である聖ドミニコに捧げられたものであるのに対し、礼拝堂は Divino Señor de Ayuxi と呼ばれるキリストの磔刑像に捧げられたものである。これら二つが本研究の主な対象となる宗教空間である。



写真1 教会堂と修道院(筆者撮影:2019年3月)



写真2 カルバリオ礼拝堂(筆者撮影:2019年3月)

(2) 宗教空間の変遷

(i) 先スペイン期 (~1521年)

ミシュテカでは偶像 (ídolo) と呼ばれる、主に石でできた持ち運びができる小さな像が信仰の対象となっており、この像に対して、供え物、動物や人間の生贄が捧げる儀礼が行われていた⁶。これらを含む伝統的な宗教儀礼は、主に、神殿や、植民地時代にカシーケと呼ばれていた先住民の王の住まい (宮殿)、そして集落の周辺に広がる山や洞窟などの自然環境の中で実施されていた。つまり、集落の中心部と、集落の周辺部が大きく二つの宗教空間であったと考えられる。

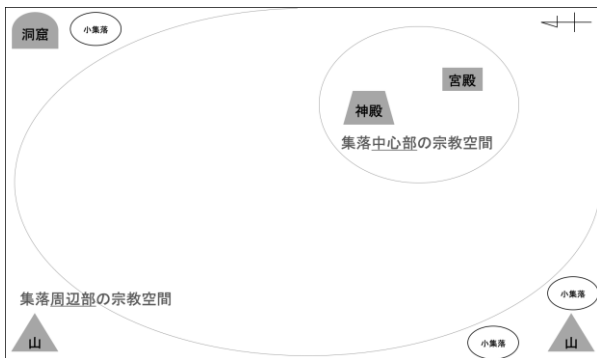


図1 宗教空間の概略図 (先スペイン期)

(ii) 布教初期 (1521年~1540年代)

植民地時代に入るとすぐにカトリックの修道会ドミニコ会の修道士が進出し、布教活動が行われた。1520年代後半にはカシーケなどの一部の先住民有力者がカトリックの洗礼を受けている⁷。またこの頃には初期の教会堂が建てられていた⁸。一方で、洞窟や宮殿において、人身供儀を伴う先スペイン期の伝統的な宗教活動も継続されていた。つまり伝統的宗教とカトリックが同時に存在していた時期と言える。当時ジャンウイトランを治めていたスペイン人支配者は、カシーケなどの先住民の有力者と友好的関係を築いており、伝統的な宗教に対して寛容であったが、修道士の布教活動には非協力的であった⁹。また、植民地時代初期は修道士の数が少なく、広い範囲に影響を与えるまでに至らなかったことなども、植民地化の開始とそれに伴うカトリックの布教の流れの中で、先スペイン期からの伝統的宗教が色濃く継続されていた背景であったと考えられる。しかし、このような状況は長くは続かず、1540年代以降、カシーケとスペイン人支配者に対して、偶像崇拜を告発する異端審問が実施された結果、伝統的宗教は縮小し、以降カトリックの宗教空間が拡大していくこととなった。

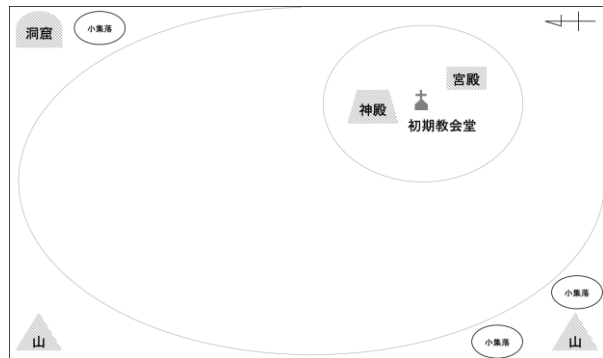


図2 宗教空間の概略図 (布教初期)

(iii) 宗教空間拡大期 (1550年代~18世紀)

異端審問を経て、先スペイン期の伝統的宗教空間が縮小に向かい、カトリックの宗教空間が拡大していった。アトリオ・教会堂・修道院から構成されるドミニコ会の修道院複合施設の建設が1550年頃に始まり、伝統的宗教空間を踏襲するように、神殿があった場所に置かれた。遺跡化した神殿では一時、自傷を伴う伝統的宗教儀礼が行われたが、のちに破壊され、消失した¹⁰。また、カシーケの宮殿は新たに建設されたが、先スペイン期のように生贄などは行われず、宗教的機能は失われた。



写真3 現在の宮殿跡 (筆者撮影: 2019年3月)

17世紀はコフラディアなど、住民による信徒団体が増加、発展した時代であった。ジャンウイトランでは、ドミニコ会の重要な信仰対象であるロザリオの聖母を崇拝の対象とするコフラディアをはじめとして、複数の信徒団体が存在していた。それぞれ崇拝する聖人は異なり、教会堂の中にある聖人の祭壇にある装飾品の管理なども行っていた¹¹。

また、17世紀の初めまでに修道院複合施設の北と西に、それぞれ聖十字架の礼拝堂 (現在のカルバリオ礼拝堂)、サン・セバスティアン礼拝堂が建設された。集落中心部と集落周辺部の間に新たな宗教空間として存在していたが、これは先スペイン期に起源を持つ、集落と周辺の構成地区 (パリオ) との関

係が背景にある。当時植民地政府が実施した集住政策は成功せず、住民は中心部から離れた場所に居住し続けていた¹²。礼拝堂は、周辺の地区と中心部の修道院複合施設の間に建設され、新たな宗教空間を形成していた。また、アトリオでは各地区に存在していたキリストの磔刑像が持ち寄られ、宗教行列が行われていた¹³。住民にとって教会堂・アトリオ・礼拝堂は宗教祭礼等を通して自身の信仰を表現する場所であったと考えられる。

修道院は修道士の居住空間であり、礼拝などが行われる宗教空間でもあった。修道会の会議の会場になることもあり、ジャンウイトランの修道院はドミニコ会にとって重要な修道院の一つであった。

ヌエバ・エスパーニャ副王領における布教活動は、修道会によって担われていたため、司教・司祭・助祭からなるカトリック教会の中央組織である在俗教会との対立も大きかった。18世紀には多くのドミニコ会の教区が在俗化されていったが、ジャンウイトランの修道院はその規模の大きさなどを理由に、ドミニコ会の管理下にあり続けた。

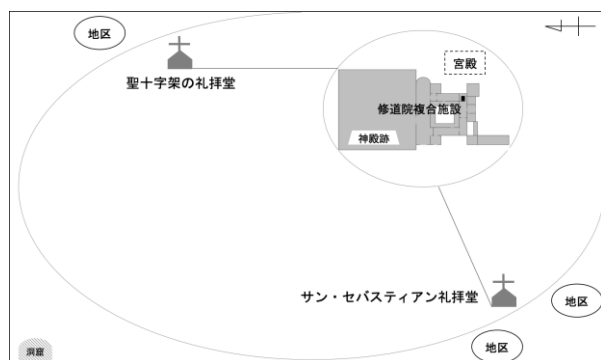


図3 宗教空間の概略図（宗教空間拡大期）

(iv) 宗教機能停滞期（19世紀）

1810年にスペインからの独立運動が開始されると、ジャンウイトランもその影響を受けた。修道院全体が軍事要塞と化し、アトリオは練兵場として、修道院は兵士の寝床や武器庫として利用された¹⁴。

19世紀はメキシコのカトリック教会が弱体化した時代であった。独立当初は国教としての地位を維持していたカトリックであったが、次第に聖職者の権利などが縮小され、1857年憲法で国教の地位を失った。19世紀の半ばに制定された諸法令は教会にとって大きな打撃となった。1859年に制定された教会資産国有化法では、教会のもつ資産が国有化され、信徒団体の廃絶が定められた。この法令の対象となった信徒団体には、植民地時代を通して発展し、様々な宗教祭礼の経済的な基盤となっていたコフラディ

アも含まれていた。土地などの共有資産が解体され、祭礼に関しては、コフラディアの代表者であったマヨルドモが個人の負担によって実施するシステムに変化していった¹⁵。

1890年代にはドミニコ会士が修道院から退却し、修道院の宗教的機能は失われた。また、礼拝堂に関しては、新たなシステムに変化した信徒団体が20世紀まで存在していることから、この時代に宗教機能が消失するまでには至らなかったと考えられる。

メキシコにおけるカトリック教会の弱体化の影響があり、ジャンウイトランの宗教空間は発展ではなく、停滞・縮小へ向かっていたと考えられるが、基本的には宗教空間拡大期の宗教空間を維持していた。

(v) 宗教機能分離期（20世紀～）

1910年に始まったメキシコ革命により、約30年続いたポルフィリオ・ディアス大統領の独裁政権が倒れ国内が大きく揺れ動いた。革命後に制定された1917年憲法は反カトリック的性格を持ち、メキシコのカトリック教会は法人格を失っている¹⁶。

ジャンウイトランの修道院では、司祭が失踪し、略奪を目的とした破壊行為が行われるなど¹⁷、教会の弱体化の影響などもあり、管理が十分に行われていない状態であった。そして、農業協同組合の倉庫や事務所、鶏小屋など、宗教機能ではない用途での利用が常態化していた¹⁸。教会堂も同じく荒廃していたが修復の手続きや、損傷を受けた祭壇の装飾品などの移設が住民によって行われるなど¹⁹、住民との関わりは継続されていた。アトリオでも天使像とキリストの磔刑像を伴った宗教行列が続けられており、教会堂と同じく、宗教機能は維持されていた。

現在実施されている宗教祭礼の中で重要な祭礼が、聖週間と、5月に実施される聖十字架の礼拝堂（現カルバリオ礼拝堂）のキリストの磔刑像（Divino Señor de Ayuxi）の祭礼である²⁰。聖週間にはカルバリオ礼拝堂と教会堂間、およびアトリオで複数回宗教行列が行われ、それらの空間と行列で利用される集落内の道が祭礼の舞台となる。5月の祭礼では、カルバリオ礼拝堂と教会堂間の宗教行列に加えて、教会堂正面での踊りやアトリオで花火が実施される。これらの祭礼は、19世紀に解体され変化した信徒団体であるマヨルドミーアや、それがさらに変化したコミシオン（ムニシピオが選出した複数の住民で構成される組織）が中心となって実施されている。

西のサン・セバスティアン礼拝堂は、1950年代に遺跡化しており、信徒団体も失われている様子から、

宗教機能が消失、または低下していると考えられる。

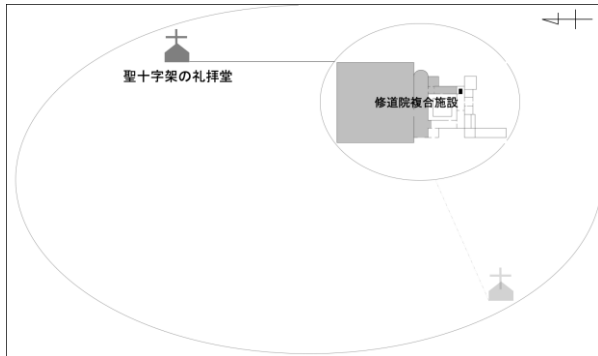


図5 宗教空間の概略図（宗教空間分離期）

以上五つの時代の宗教空間の変遷から、現在まで宗教機能を維持している空間は教会堂・アトリオ・礼拝堂であることがわかった。これらの空間はカトリックの宗教空間であると同時に、礼拝堂形成の背景である集落と地区との関係などからもわかるように、ジャンウィトランの地域性を示す空間でもありと考えることができる。

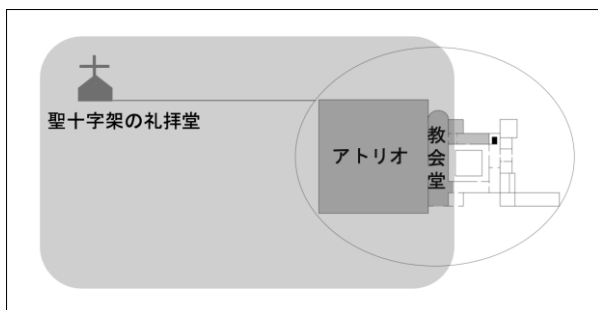


図6 宗教空間の概略図（現在）

4. 現在の宗教空間の機能

(1) 旧修道院博物館の展示品、説明板、イベント

旧修道院博物館は2012年9月に開館し、INAH(国立歴史人類学庁)が管理・運営している。1階に展示室(三つの常設展示室、二つの特別展示室)が、2階にはINAH事務所、資料室、図書室が設置されている。宗教機能が失われた修道院は現在どのように利用されているのか、展示品、説明板、イベントの内容から確認し、その特徴を明らかにする。

(i) 展示品

三つの常設展示室には、合計17点の展示品が設置されている。それらの年代を分析した。その結果、常設展示室1には主に16世紀のもの、常設展示室2、3には18世紀のものがそれぞれ配置されていた(表1)。常設展示室全体としては18世紀の展示品が最も多く、それらはジャンウィトランで現在でも実施されている宗教祭礼で使用される大天使像やキリス

ト像であった。

表1 展示品の展示場所と年代

場所	~15世紀	16世紀	17世紀	18世紀	19世紀	20世紀	不明
常設展示室1		3	1				3
常設展示室2				6			1
常設展示室3				3			
合計	0	3	1	9	0	0	4

(ii) 説明板

博物館には合計12台の説明板が設置されている。設置場所の空間そのものを説明している説明板を除外した8台の説明板(表2の1~8)を対象とし、年代を表す表現を抽出し分析した。その結果、全38件の年代表現の内、70%以上が16世紀を示していた。その16世紀を示す年代表現の内、50%以上が1550年以前を示していた。これは修道院複合施設の建設前の時代を示している。また、説明板内の地図は、メキシコ全土、オアハカ州の地図のみでそこには先住民言語に基づく地域区分が示されていた。ジャンウィトランの地図などは示されていない。

表2 説明板の設置場所、内容、種類

	設置場所	内容
1	博物館受付	修道院の各空間
2		メキシコにおける布教
3	1階回廊	教会堂のレタプロ
4	常設展示室1	オアハカ州、ミシュテカ地域の布教
5		ジャンウィトランのカシーケ
6		先スペイン期のジャンウィトラン
7		ジャンウィトラン絵文書
8	常設展示室2	大天使像
9	特別展示室2	修道院の台所
10	階段	修道院の壁画
11	2階僧坊	修道院の僧坊
12	2階旧トイレ	修道院の旧トイレ

(iii) イベント

博物館HP等で確認できたイベント48件を対象に、内容及びタイトルから特徴を分析した。全48件の内、19件のタイトルにミシュテカを意味する言葉が使われている一方、ジャンウィトランという言葉が使われているイベントは5件にとどまった。また、内容は芸術作品(絵画、写真、彫刻、現代アート等)の展示、学術講演、民芸品フェスティバル、音楽演奏、式典など様々であり、幅広い文化的枠組みがテーマとして扱われていた。

以上、展示品、説明板、イベントの内容から、現在の旧修道院博物館の視点は、ジャンウィトランのムニシピオや地区という場所よりも、それらを含んだ、ミシュテカ、オアハカ州、先住民などの、より広い文化的な枠組みに置かれつつあると考えられる。

5. 結論

ジャンウィトランにおける宗教空間は、まず、先スペイン期には集落の中心部と、周辺部の大きく二つ存在していた。布教初期には、それら二つの宗教空間を踏襲しながら中心部ではカトリックの影響が生じ始めた。その後、異端審問を契機として伝統的な宗教活動は縮小し、カトリックが確立していった。その後、先スペイン期に起源を持つ集落と地区の関係を背景に、集落中心部と周辺部の中間地点という新たな場所に礼拝堂という新たな宗教空間が生まれた。この時期の宗教空間が現在の宗教空間の基礎となっている。19世紀、20世紀は特に修道院の機能の低下が著しく、修道士の退去後は様々な用途に利用され、宗教機能を失い、現在では博物館となっている。北の礼拝堂は、現在でも集落最大規模の祭礼の中心地として宗教機能を維持している。

五つの時代区分による変遷から、宗教機能を現在も維持しているのは、教会堂・アトリオ・聖十字架の礼拝堂（カルバリオ礼拝堂）であることがわかった。そしてこの空間は、カトリックの宗教空間であるだけでなく、ジャンウィトランの地域性を示している空間であった。

また、宗教機能が失われた修道院に設置された博物館は、展示品、説明板、イベントの内容から、ジャンウィトランという小さな地域というよりも、それを含む、より大きな文化的枠組みに視点が置かれつつあることがわかった。

したがって、現在まで宗教機能を維持している三つの空間を継承していくことがジャンウィトランにとって重要であると考えられる。そのためには、それぞれの有形の宗教空間を残していくことも重要であるが、それと同時に、これら三つの宗教空間を結ぶ役割を担っている、宗教祭礼などを通じた住民の関わり方をどう続けていくかの検討が必要である。また、博物館においてもジャンウィトランの地域により根ざした時代ごとの内容を充実させ、そこからより大きな地域性へ派生させるような展示を行うなどの工夫が一つの提案として考えられる。

脚注

- 1) 2017年の観光客数は18,532人（メキシコ国立統計地理情報院）
- 2) 加藤薫：「16世紀メキシコ屋外教会の類型とその中におけるクイラパン三身廊式教会の位置づけ」、ラテンアメリカ研究年報

No.02、p.5、1982

- 3) 落合一泰：〈メキシコなるもの〉の視覚化とその背後、一橋論叢 120(4)、p.58、1998
- 4) 青木利夫：メキシコにおける二言語教育と住民の教育欲求、広島大学総合科学部紀要.I、地域文化研究 28 巻、p.71-90、2002
- 5) 米村明夫：国際法、メキシコ憲法に見る先住民の権利の発展、ラテンアメリカレポート 32(2)、pp.67-80、2015
- 6) Spores Ronald：Ñuu Ñudzahui. La Mixteca de Oaxaca: La evolución de la cultura mixteca desde los primeros pueblos preclásicos hasta la Independencia, Mexico、p.117、2018
- 7) González Leyva, Alejandra：El convento de Yanhuitlán y sus capillas de visita. Construcción y arte en el país de las nubes、UNAM、p.74、2009
- 8) *Ibid.*、p.76
- 9) Mora, Teresa and Molinari Soriano, María Sara：Tradición e identidad: semana santa en Yanhuitlán, Oaxaca、INAH、p.23、2002
- 10) Terraciano Kevin：Los mixtecos de la Oaxaca colonial: la historia ñudzahui del siglo XVI al XVIII、Mexico、p.436、2014
- 11) Mora and Molinari Soriano、op. cit.、p.92
- 12) Pérez Ortiz, Alfonso：Congregation in the Upper Mixtec, Signos Históricos, vol. xix, no. 38、p.58、2017
- 13) Frassani Alessia：The Church and Convento of Santo Domingo Yanhuitlan, Oaxaca: Art, Politics and Religion in a Mixtec Village, Sixteenth Through Eighteenth Centuries、Graduate Center, City University of New York、p.241、2009
- 14) González Leyva、op. cit.、p.205
- 15) Mendoza García, J Edgar：Las Cofradías de la Mixteca Alta ante el embate liberal del siglo XIX、p.392、2010
- 16) 国本伊代：「メキシコ革命とカトリック教会：近代国家形成過程における国家と宗教の対立と有和」、中央大学出版部、p.198、2009
- 17) González Leyva、op. cit.、p.222
- 18) González Leyva、op. cit.、pp.223-224
- 19) Macías Guzmán, Eugenia：Sentido social en la preservación de bienes culturales: La restauración en una comunidad rural. El caso de Yanhuitlán, Oaxaca México、p.34、2005
- 20) Frassani、op.cit.、p.225